

7. 岩元 美智彦氏（株式会社 JEPLAN 取締役執行役員会長）

「ワクワク、ドキドキの星・北九州！楽しいが正しいのまちに」



岩元 美智彦（いわもと みちひこ）

鹿児島県出身。

北九州市立大学卒業後、繊維専門商社に就職。容器包装リサイクル法の制定を機に、繊維リサイクルに深く携わる。

2007 年に現社長の高尾正樹氏と共同で日本環境設計(株)（現・(株)JEPLAN）を創業。2015 年アショカフェローに選出。2016 年より会長。

「鉄のまちのイメージを生かし次の展開へ」

北九州市は「鉄のまち」のイメージが強く、加えて、化学会社も多いのが実情で、それらを生かし、次に展開していけば良いと考えます。

共通点はやはり「ものづくり」。非常に大事な財産です。日本人にとって「ものづくり」は分かりやすく、好きな人も多いのではないのでしょうか。具体的な製品に落とし込み、さらに「仕組みにする」「基準をつくる」というところが重要で、北九州市にその素地・ベースが十分にあると考えています。

「北九州方式を作り、世界を巻き込んでいく」

当社の北九州工場を改築・拡張する形で仏企業と準商用レベルの設備を稼働しています。この企業は化学プラントの OS（オペレーティングシステム）を握り、プラントプロセスのルールをつくっているような会社です。例えば日本の化学メーカーが工場配管を変更しようとしても、同社の許可が必要であるように、全体のプロセスを支配できるような仕組みを有しています。

しかしながら、日本企業は基準づくりができていないため市場競争では後塵を拝する形となっています。

現在、PET のリサイクル一つをとっても、定

義がない状況です。そもそも「何をリサイクルと呼ぶか」については、ルールづくりの必要があると思います。例えば、使用済の服など繊維由来の当社原料を活用した製品がある一方、服ではなく PET ボトルを原料につくる服もあり、後者はヨーロッパの基準ではリサイクルと呼べません。このように欧米で言われていることを守るばかりでなく、「自らが基準をつくる」という視点を持つことが大事です。

ケミカルリサイクルに関する基準を国内でつくることができれば、各企業がその範疇でのづくりをするようになるので、より効率的になる部分が出てきます。ぜひ「北九州方式」の「基準」「定義」を国や国際機関、メーカーを巻き込んでつくり、発信することができればと思います。世界標準として、また、稼ぐこともできるということが全世界に広がっていくと良いですね。

「理念・技術・実績をもとにルールづくりを」

世界におけるルールづくりのためには、資源の完全循環の国内完結を実現する必要があります。それには、「理念」「技術」「実績」のどれもが重要で、目に見える実績があれば、海外においてもルール化に関する発言に重みが出てきます。加えて、世界のパートナーと基準を

つくっていく視点も不可欠です。

また、化学業界では、技術が安定するまで30～40年といった時間も研究費も人手もかかります。そのため、当社としても、本拠地を作り、周りの企業を巻き込みながら、早く実現する方法やコストを抑える方法を研究していきたいと考えています。

「リサイクルの仕組みづくりを市民の文化に」

ルールができれば、廃プラスチックがより資源として扱われることとなり、まちからごみが無くなるのではないのでしょうか。このように一部の技術としてのみならず、文化や社会システムを変えていくことへとつながっていくと考えています。これには「回収ボックスがある」など身近であることが大事であり、眼鏡、家電、おもちゃなどの回収を通じて、みんなで参加し、自分事としての行動変容の積み重ねが文化につながるのです。

併せて、廃棄物から作業服や学生服など身近なものを作るなど、具体的な行動をうまくつなぎ合わせれば、まちとしてもイメージしやすくなります。「いいな」「具体的だな」「腹落ちしたな」ということが大事です。

例えば当社が過去に携わった事例としておもちゃのリサイクルが挙げられます。日本で実績をつくり、海外本社も注目するに至りました。日本の動きが世界とつながっているということのグッドプラクティスであり、是非知ってほしいですね。

このように、リサイクルについては、世界のパートナーと一緒に仕組みをつくり発表するという段階にきています。今後も積極的にコラボしていけば良いのではないのでしょうか。国内競争ではなく、自治体も国もコラボし、一緒になって世界と戦わないといけません。

北九州市は循環型社会をつくるポテンシャルがあると感じています。今後、効率よく1対1のリサイクルができれば、外から資源を買っ

てくる必要がなくなり、ひいては世界における資源の奪い合いもなくなるのではないのでしょうか。ぜひ、全世界が望む地球環境と世界平和のためにも資源循環のルールづくりをすべきだと考えます。

「投資家を巻き込み、「星」を作る」

リサイクルの技術やルールづくりには、資金も必要となります。そのため、世界の投資家と対等に話せるような知識と経験が必要となってくると思います。例えば、テスラを育てたファンドは「星をつくった」と評されています。「星」ができれば、そこに重力が生まれます。当社も世界に向けて「持続可能な惑星をつくらう」という思いを発信するために、社名をJEPLANに変えたのはまさにそれが理由です。

「ワクワク、ドキドキの星（市、まち）へ」

ワクワクやドキドキがあるからヒト・モノ・カネが集まります。「デロリアンをリサイクルで走らせる」ことは、憧れや夢がありますよね。

「楽しい」が「正しい」の典型の事例だと思います。技術開発、仕組みづくり、ブランディングの一連の取組を通じて、着実に良い社会になって行っていると感じました。次は世界CO2が少なく、象徴になる製品をつくりたいですね。

このように当社が展開している北九州市での事業においては、市役所のサポートもあり、様々な許認可を含めてワンストップで実施できています。ぜひ北九州市には「ワクワク・ドキドキの星」を目指してほしいと思います。